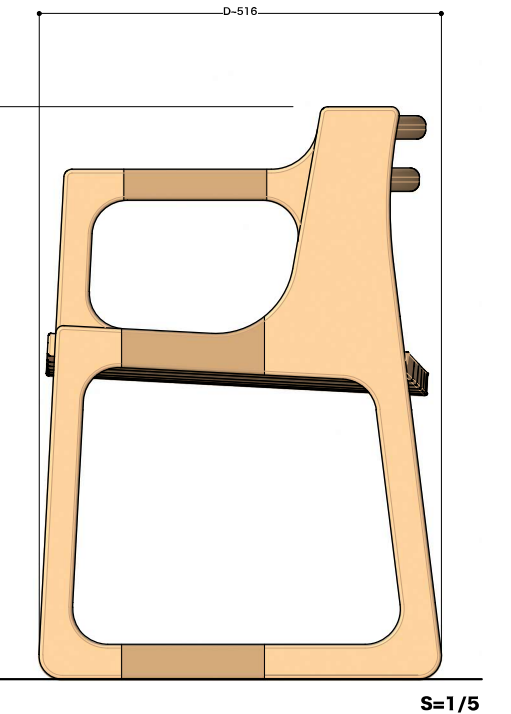
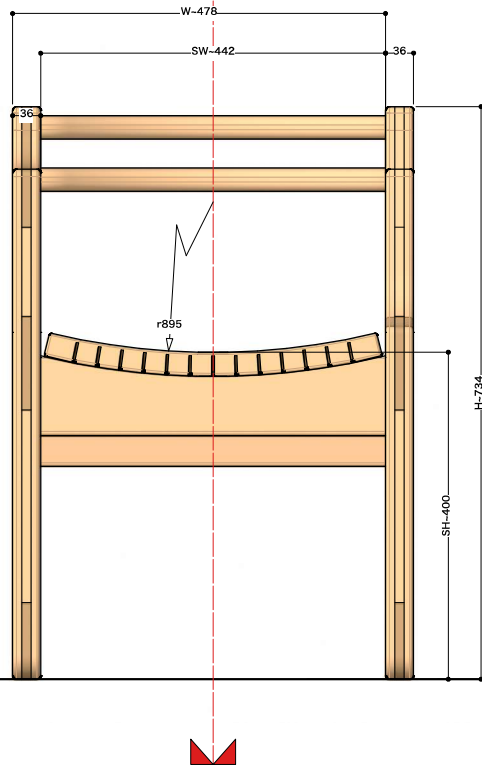
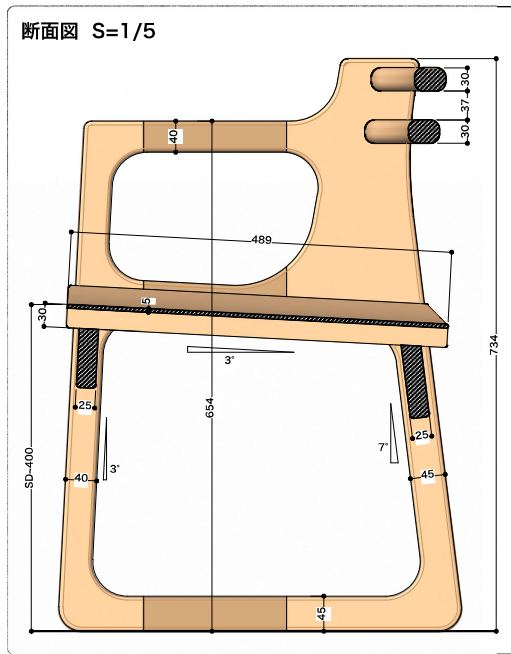
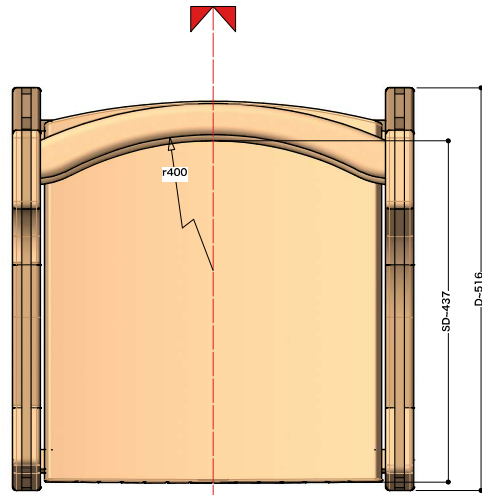


KITAYAMA

京都産のスギを使った「話がしたくなる椅子」

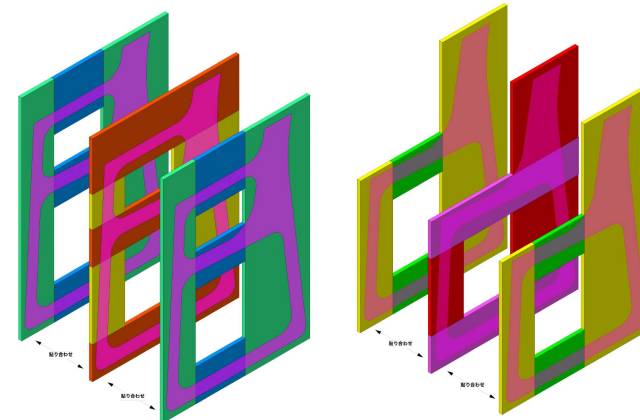
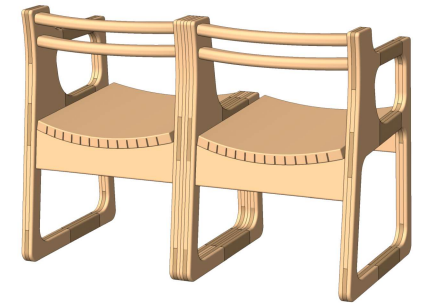
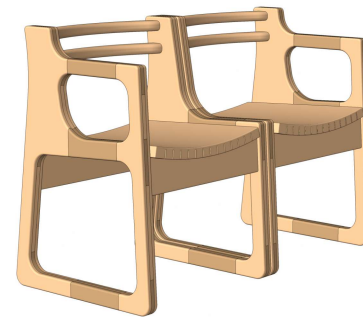
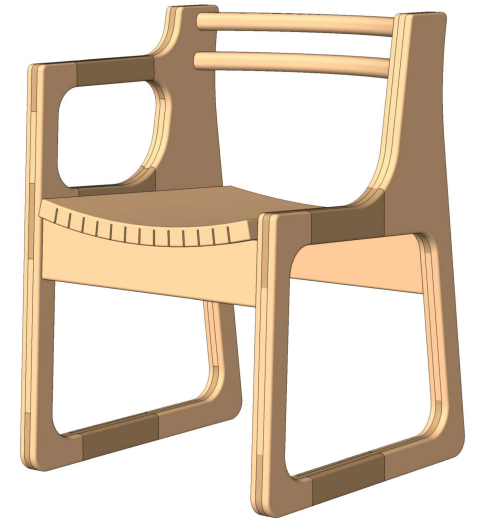


S=1/5

針葉樹であるスギは、比重0.38で空隙率が高く、軽くて柔らかいためまさに高齢者や子ども等の家具に最適な木材である。しかし、材が柔らかいため従来の堅木のイスのような納接ぎではなくすぐに穴が緩んだり納が折れてしまうため、特にイスのような脚部の家具にはスギは殆ど使われることはなかった。

このデザインではスギを三枚の板の貼り合わせとし、部材の交点（接合部分）は縦横の部材を交互に交差させて接着し、そこからルーターで脚フレームのかたちを削り出したものを構造としている。さらに、部材の交差による擬似的な通し納接ぎ状態を作りながら交差部分の内角を大きなRにすることで応力を分散させ、また三層貼り合わせにすることで無垢材だと起こる目切れによる破損を防ぐことができるため、柔らかいスギでもイスの材にできるデザインである。

今回の提案は、会話を楽しむために並べて置けるように片アームとし、右肘タイプと左肘タイプを並べることで肘がある種の結界を生み出し、親子や友人同士、また恋人たちなどのための親密な空間をつくれるように考えた。座面は、高齢者から子どもまで誰もが座り易いように低めに設定し、ゆったりと座れるよう先端で400hとした。座板は、成型合板の技術がなくとも制作できるよう「挽き曲げ」成型の座面としている。また、両側とも同じタイプの脚フレームを取り付けることで、簡単に両肘のアームチェアやサイドチェアを制作することも可能である。



●構造の考え方

スギの接合部を壊れないようにするためには、堅木のような無垢材による納接ぎではなく、すぐに穴が緩み納も折れることがあるが、今回は3枚の板を貼り合わせた合板状にして、貼り合わせる際、縦と横の部材を交互に伸ばして接着することで、交点は擬似的な通し納接ぎ状態となり、またルーターでイスの形状に削り出す際、交差させて貼った部分の内側を大きなRで削ることで、イスに加わる応力を分散させ接合部分の破損を無くす、という構造の考え方である。

また、脚の形状は、一般的な四本脚ではなく京都という日本の伝統的な都市空間に合うようループ脚としているが、ループにすることで脚先が繋がり構造的に閉じることで安定した強度を期待することができる。